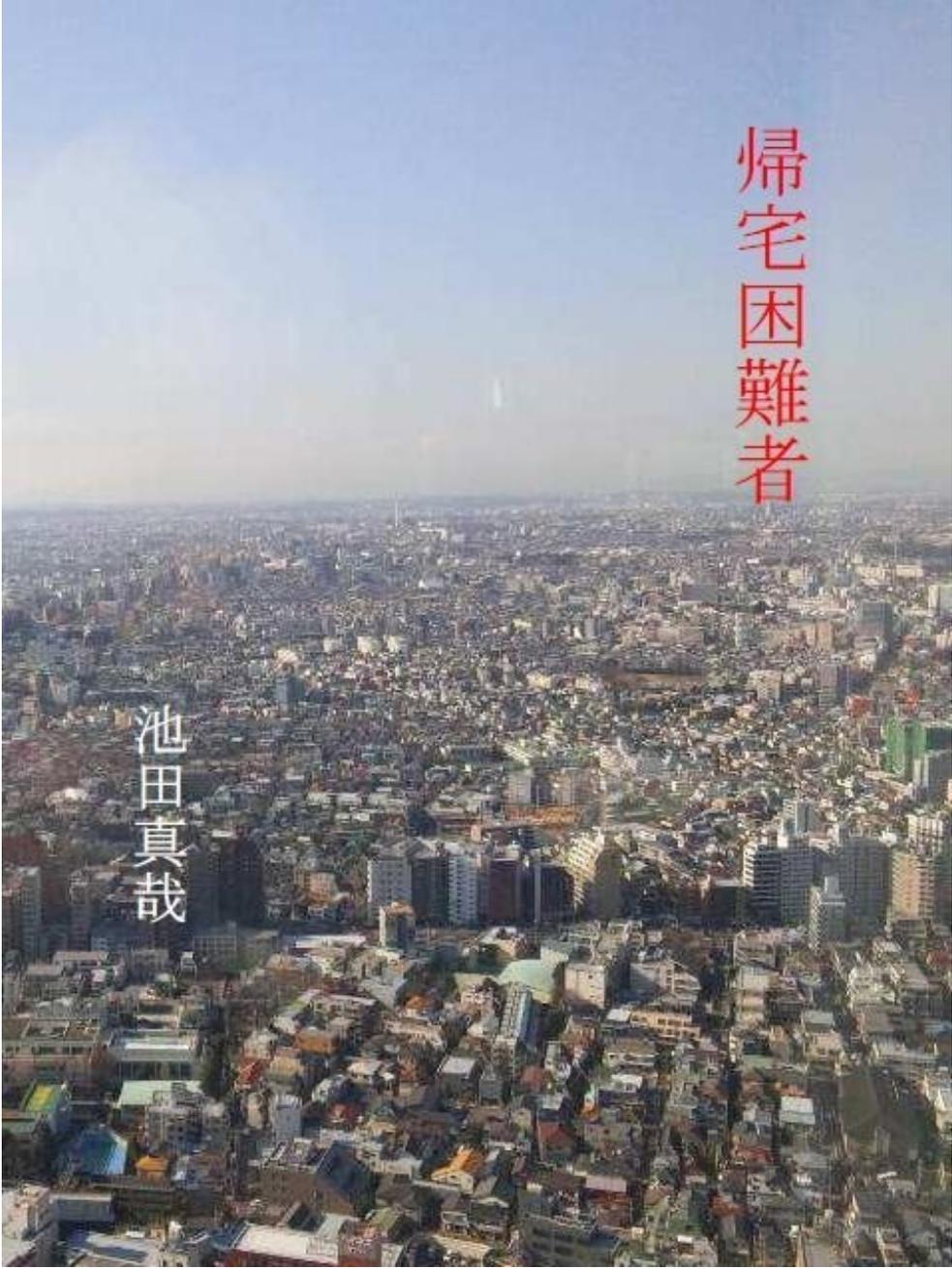


帰宅困難者

池田真哉



「契約を変えるだけで、コストダウンできるなんて、こんないい話はない」

恰幅のよいビルオーナー会社の担当は、袴田輝友に満面の笑みを浮かべ、そう話した。

「お客様は、保険については対策をとらないままになりがちなんです。最初の契約を交わしたままの方が、ほとんどですよ。もったいないことです。見直しはすべきです。その点、御社は決断がはやく素晴らしい」

「今回は、私がんばっちゃったからね。こんなに得なことはないって、社内叫びまわったから、すすすって、決済もおちやったよ」

ビルオーナー会社の担当の隣に座る建物管理会社の担当も、笑みを浮かべながらいう。

「さすがでしたね。でも、私をご提案させて頂いたんですからね。こんないい商品があるって」

「そうだったな。これこそ、ウィン、ウィン、ウインの関係だ」

「まあ、あまり、私の得はないですがね。ご協力申し上げたということで、気持ちは晴れやかです」

「だから、ウィン、ウィン、ウィンだ」

「喜んでいただいて、嬉しいです」

袴田輝友は腹の底から安堵していた。今年度末ぎりぎり目標達成に滑り込んだのだ。

会社の捺印を済ませた契約書を取り出した。あとはビルオーナーが、捺印を済ませれば完了である。

「捺印は2部ね。地震保険の契約期間は4月1日から1年間。今日の日付は3月11日。あとは、大丈夫ですよ。何度も確認したから。わかりました。すぐに捺すから、ここで待っててください」

ビルオーナー会社の担当は、打ち合わせコーナーの席を外し、執務スペースの方へ行った。

「本当にありがとうございます。ご紹介していただいて助かります」

袴田は丁重に礼をいうと、建物管理会社の担当は、にっこり笑う。

「うちのフィーも頼みますよ。うひ！」

「当然ですよ。ところで、このあたりの土地、どうなるんでしょうね。豊洲埠頭は築地市場の代替地になるんでしょ。都庁も来年度の予算ついたらしいですけど」

「いや、どうなるのかな。議会も民主党が多数になるし、土壌汚染の問題も、さらに激化してますからね」

老朽化した築地市場を豊洲埠頭に移転させる計画があるが、賛成派と反対派に分かれて激しい論戦が繰り広げられている。過去に何度か移転計画もあったが、頓挫したという経緯がある。賛成派は豊洲で決めなければ、市場の再生はないと必死である。反対派は現地建て替えを主張するが、市場機能を活かしたままでの建て替えは時間も費用も途方もなくかかる。建物管理会社の担当は、神妙な面持ちで受けこたえていた。

すると、床から突き上げる今までに感じたことのない激しい揺れを感じた。

「おっと。うう？ あれ？ 揺れてる。地震ですよ。あれ？ でかいよ。でかいよ！」

打ち合わせは建物15階で行なっていた。建物が船になって揺られているかのように右に左に揺れる。揺れる。

「机の下に入りましょう。ああ、でかい。でかいよ。これは、ああー、やばい。やばい」

袴田と建物管理会社の担当は、机の下の潜り、転倒しないようにテーブルの脚に必死につかまっている。

「これは、でかい。地震だ。しかも、長い。まだ、続いている」

ひどい揺れにもかかわらず、ビルオーナーの担当が、執務スペースから、こちらへ戻ろうとしている。右に行ったり、左に行ったり、足元が危うい。そして、ついに転倒して、頭を机の角にぶつけたようだ。

「あたっ！ イタタタあ」

ビルオーナーの担当は、床に転げ回っている。そしてよく見ると、頭から血を流し、赤い鮮血が顔面にひた流れている。さらに、追い打ちをかけるように、机の上にあるまとまった量のファイルや書類が、その担当の頭を打った。フロアーにいる誰もが、床に這いつくばり、左右の揺れと闘っている。ビルオーナーの担当は、俯せになり、落下物がないか確かめつつ、抱腹前進して、打ち合わせコーナーへ向かう。

「大丈夫ですか？」

袴田は叫んだ。

「こっち、こっち」

袴田は、抱腹前進している担当を抱きかかえ、打ち合わせコーナーの机の下に潜った。

袴田は、血まみれになったその担当の頭を、懸命に自分のハンカチで拭き取っていると、髪の毛全体が動いた。えっ？ 大量に抜けてしまった？ まさか。袴田は大声で叫んでいた。

「大怪我ですよ！」

袴田は懸命に血を拭き取っていた。左右の揺れはだいぶおさまったものの、まだまだ続いている。フロアー全体に、地震に衝撃を受けた人達のどよめきの声が広がる。

「大丈夫だよ。大丈夫。目の上に傷口があって、そこを押さえてくれ。そうだ。そうだ。あっ。髪は大丈夫だ。それはかつら。かつらがちょっとずれただけだ」

ビルオーナー会社の担当は、落ち着いて神妙な面持ちで話す。

「失礼しました。でも、大丈夫ですか。傷口は？」

ビルオーナー会社の担当は、抱きかかえられたままの状態、すばやくかつらを元の位置に戻し、丁寧に微調整をしている。揺れはおさまっている。担当は起き上がる。

「私は、トイレで血を洗ってくる。あっ、その前に、打ち合わせは中断だ。契約書もこの通りだ。血まみれだ。あ～あ、せっかく、社印を綺麗に押したのにな。こんなんじゃ、契約書にならない。袴田さん、契約書は後日、再度、作り直しとしよう。これで契約破棄ってことはないですよ。弊社内でも社内決済されたものですからね」

「わかりました。でも、契約開始日は4月1日からですから、今回の地震については適用されません」

「わかっとするよ」

「大丈夫ですか？ 私がトイレまでお連れします」

「大丈夫。ここで打ち合わせは終わり。袴田さんも、会社に連絡を入れたほうがいい」

そして、ビルオーナーの担当は、建物管理会社の担当に向かっていった。

「建物の被害状況をすぐに確認してください。すべてフロアー、すべての設備を点検だ。必要があれば、暫定対応が取れる体制を取るように」

「わかりました。被災状況を確認します」

ビル内は、騒然としており、泣き出す女性も何人かいた。フロアー内で様子を観る者もいれば、非常階段で屋外に避難するものもいた。携帯電話で会社に連絡するが、つながらない。携帯メールを送ってみても、返事は返ってこない。妻の袴田佳穂にも連絡するが、つながらない。周囲の者も、しきりに自宅や仕事の相手先に連絡をとろうとするが、誰もつながらないようであった。中には、ツイッターは使えると言って大声で叫んでいる者がいたが、袴田はツイッターを使ってはいなかった。袴田は、騒然とするビル内を徘徊し、非常階段から屋外に出ることにした。

屋外へ出ると、多くの人々が路上へ出て、周囲の様子を伺っていた。携帯電話をいじる者は一様に首をひねっていた。地下鉄有楽町線豊洲駅まで行くが、地下鉄は止まり、改札前は人で溢れかえっている。道具を奪われた人々は、為すすべもなく途方に暮れていた。

「まったく、どうなっているんだ？ 会社に戻れないじゃないか」

袴田は地上に戻り、様子を見に周辺を歩き回った。すると、西の空のほうに黒い煙がもうもうと立ち上がっているのが見える。それが何なのか確かめようと豊洲埠頭の方へ歩いて行った。遠くに黒い煙が見えるが、何が燃えているのかはわからない。道路を挟んだ左右の敷地は市場予定地で、だだっぴろい広大な土地が広がっている。カンカンカンと鐘の音とサイレンが鳴り響いていたので後ろを振り返ると、消防車が猛スピードで迫っていた。進行方向を見ると、有明北のほうから歩行者の大群が押し寄せ、こちらへ歩いてくる。この辺は通常、昼間でも人がいないはずだが、多くの人達が黒い波のように押し寄せようとしている。異常な光景であった。大変な事態になっていることは、袴田も理解しつつあった。

「まず、電話をかけるか。公衆電話なら使えるかもしれない」

そう思い、近くのショッピングセンターへ行き、公衆電話を探す。難なく見つかる。大勢の人が並んでいる。袴田も列に加わり、順番を待つ。ところがひとりの女性がこともあろうに長電話をしており、なかなか順番が回ってこない。まるで実況中継のように、この状況を詳細に説明している。そして、また別の人に電話を掛け直す。列に並んでいる人もおかしいと気づき始める。やがて、待っているもの全員の苛立ちが彼女に注がれる。その苛立ちを代弁するかのようになり、袴田の前に並んでいた恰幅のよい50才前後の男が叫んだ。

「こんな時にはな。要件だけ話すんだよ。いつまで話してんだよ。人が沢山待ってるんだぞ」

すると、その女性は後ろを一瞥し、困惑したような表情で電話を切り、その場を立ち去った。その後、列はスムーズに流れ、袴田の順番がくる。袴田は会社に電話し、地下鉄が止まっていること、街は混乱していることを説明し、今日は仕事を上がり、自宅へ向かうことを話した。そして、妻の佳穂が働く会社へ連絡して、自分は柏へ帰るが、鉄道も止まっていることだし、会社に残っていたほうがよいだろうと伝えた。佳穂は、事務所に待機していると輝友に伝えた。電話を終えると、ショッピングセンターから出る。新橋駅行きや東京駅行きの路線バスが走るが、バ

ス停は長蛇の列で、また、バスの中は人でぎゅうぎゅう詰めであった。袴田は、バスに乗ろうと一旦列に並ぶが、来るバスすべて満員なので、乗ることができない。しょうがないので、歩いて移動しようと考えた。大通りには、臨海部から東京駅や有楽町駅方面へ人の流れができています。

「まずは、東京駅までたどり着こう！」

袴田輝友は、そう考えて、流れに乗って歩くことにした。道を歩いていると、ヘルメットを被ったどこかの社員がまとまって団体行動をとっている姿も見受けられた。歩く女性も多く、ハイヒールの路面をコツコツと叩く音が妙に気になる。たまたま歩道横に周辺案内図があったので確認してみると、東京駅方面へ向かっていることがわかり、少し安心する。狭い路地を通り抜け、また、大きな通りへと出る。そこに、ちょうどビジネスホテルがあった。袴田輝友は、もう疲れたので、今日は泊まってもよいと一瞬考えたが、鉄道が再開されるかもしれないと思い、素通りした。後ろの女性三人組は、まさか、こんな事態になるとは思いも寄らなかったと言って話している。前にひとりの女性が歩く。髪は腰まであり、まるでモデルのようにお尻を振りながら歩いている。誰も急いでいる。袴田も急いでいる。袴田は、揺れるお尻を凝視しながら、歩いた。追いつき横目で、彼女の顔を見た。表情は、とくに慌てた感じは受けなかった。逆にどちらかという、落ち着いた、穏やかな感じを受けた。袴田が彼女を覗き込むように見たので、目と目が一瞬あった。袴田は視線を外したが、もう一度見てみた。すると、もう一度目と目が合った。袴田は何事もなかったかのように前を向いて歩き、彼女を追い越し、横断歩道前で止まった。少し遅れて彼女は袴田の隣に並んだ。ほんわりと微笑をたたえ、人をほっとさせるような雰囲気の人だ。そして、歩行者信号が青になり、いざ、進もうとしたところ、その女性は、大きな悲鳴と共に、突然、転倒した。輝友は、とっさに叫んでいた。

「大丈夫ですか？」

さっと彼女の手を取り、立ち上がらせようとするが、起き上がれない。見ると、側溝のグレーチングにヒールがはまり、そのまま折れ、そのはずみで、足首を捻ってしまったようであった。

「大丈夫ですか？」

もう一度、訊いてみた。

「イタイ、足をひねったみたい」

「いったん、道路脇へ移動して、そこで様子を見よう。靴は、そうだね。あそこに靴屋がある、僕が適当なものを買ってくる」

「いや、結構です。自分で買いますから。あいたたた」

「歩けないでしょう。ここで待っていてください」

輝友は、横断歩道を渡ったところにある個人経営の古びた靴屋へ向かった。そこは高齢者向けの靴がメインであったが、ハイヒールと同じサイズのローファーの女性用の靴を見つけ出し購入し、彼女のもとへ戻った。

「本当に助かります。私ひとりだったら、どうしていたんだろう。もうひとつのハイヒールのヒールも折って、ムリやり履いていったかしら。うそ。そんなことできないわね。足が痛い」

「ほんとだったら、冷やしたほうがいいところだ」

「ここで、いいですよ。先、急がれてるんでしょ。本当にありがとう」

「そのあとどうするの。あなたが治るまで、一緒に待っていますよ。豊洲からここまで歩いてきて、足がすこーし、疲れてるから、ちょうどいい！」

「じゃあ、ここに座って」

袴田輝友は、見知らぬ女性と歩道脇に並んで座っていた。

「長時間歩くのには、革靴はきつい」

「ハイヒールのほうが、もっときついわよ」

「ローファーならいいでしょ」

「それなら、まだ、歩けると思う」

「とにかく東京駅まで行こうと思ってね。自宅が常磐線の柏だから、東京まで行けば、あとは楽に帰れるでしょう」

「私は北千住に自宅があるの。同じ方面ね」

「大変なことになりましたね。建物のエレベーターは止まるし、ビルの中では、15階から非常階段で地上階まで降りたんだから、目が回った。電車は動かないし。あと携帯通じないし」

「そう。だから、私、誰とも連絡をとってないんです。会社にも電話してないし、実家にも、それから彼にも」

「途中、公衆電話があったら、掛けるといい。通じるから。ただ、おそらく、かなり並ばないといけない」

目の前の大通りの歩道を歩く人の数は増える一方であった。足音の重奏がやけに耳につく。しばらく休んでいた。

「痛みは、おさまった？」

彼女は足首を触ってみて、感触を確かめていた。

「そうね。歩けそうね」

「とりあえず、東京駅まで歩いてみよう。電車が動いているかもしれない」

「なんとか、行きましょう」

二人は、立ち上がり歩き始めた。彼女の名前は立花里緒奈。28才。経営コンサルタントの営業で会社まわりをしているところ、地震に見舞われ、道すがら36才の袴田輝友に偶然にも知り合い、同じ方面の帰途に向かうことになった。

東京駅はごった返していた。街頭テレビのモニターには、新宿駅、渋谷駅、新橋駅の混雑状況が映し出され、首都圏の麻痺した鉄道の運行状況を伝えていた。人々は行き場を奪われた群がり重なり合う難民さながらであった。袴田は周囲を見渡す。改札前に座り込む者が多数。通路には列車の運行状況を確認する者や、様子を見てその場に立ち止まっている者や、途方にくれている者で溢れ返っていた。

「っ！ 失敗したな」

袴田は舌打ちをした。

「電車、動きそうにないわ」

立花里緒奈は、人だかりに圧倒されて、不安そうな顔をしている。反対方向から人の流れが押

し寄せてくる。その人波に立花は押され、バランスを崩し転倒した。

「いたあ〜。 また、足をひねったみたい」

「そっちへ移動しよう」

手を差し出して、袴田は立花を支えて、流れから外れた空きスペースに移動した。二人は、人だかりの中で、うずくまって休みを取ることにした。周囲の者は、電車はいつから動くのかだとか、地震時の激しい揺れのことや、どうやって東京駅まで来たかなどを話している。人の話す声や足音が重なり駅ビル構内に耳鳴りのように響き渡る音や、群がる人の圧迫感の中に身を置いていると気分がわるくなる。それに慣れない靴で歩いたせいか、脚の付け根の部分や、膝の裏、ふくらはぎなどに疲労を感じていた。

「東北地方を震源とする大地震により、首都圏のJRおよび地下鉄の全線にわたって列車の運行を取り止めております。なお、復旧の目処はたっておりません」

駅構内放送が流れる。

「ああ、失敗した。JRも当面、動きそうもない」

袴田は、東京駅がまさかこんな混乱した状況になっているとは思ってもいなかった。少しの時間、押し黙り、今後、どうしたらよいか考えていた。

「立花さん、もうこうなったら、ホテルに泊まろう。脚も痛いでしょう。それに電車も動かない。復旧するのに相当の時間がかかるし。しかも、この大混雑だ。運が良く乗れたとしても、満員電車の中、押しつぶされるだけだ。ここは、ゆっくり泊まって、明日、落ち着いたところで帰宅したほうが、利口だと思う」

「うん」

「周辺のホテルを探してくる。ここで少しの間だけ、待っていてくれる？」

そう言い残して、袴田は、駅ビルの八重洲口から抜け出てホテルを探すことにした。安そうなビジネスホテルをあたったが、どこも満員の張り紙が貼られている。数件回るが、同じである。そして、駅前の高そうなホテルも確認したが、すべて満員であった。わるい方向へ行っている。東京駅周辺は人で溢れ返り、山手線沿いに北へ向かって大勢の人が移動している。自動車は大渋滞となり、少しも動く気配はない。袴田は、立花が待つ、東京駅へ向かい、ごった返す人の中へ入り込んで行った。雑踏の中、立花が、口を開けて座り込んでいた。

「周辺のホテルを探したけれども、すべて満員だ」

「せっかく休めると思ったのに、残念。そうしたら、どこか喫茶店でも入って、しばらく休みましよ」

「そうするか。こんな状況。ああ、頭にくる」

二人は、駅ビルを出て、駅近くのレトロな雰囲気のある喫茶店に入ることにした。袴田は、少しの苛立ちと若干の焦燥感に駆られていた。喫茶店に入ると、中年のウェイトレスが二人を迎えた。

「いらっしやいませ。大変よね。電車は止まってるんですって。駅は人で溢れ返っているみたいね。さっき来たお客さんは、電車も当面、復旧しない、ホテルもすべて満室。だから、完全に諦めて、レンタカー借りるって言ってたわよ。でも、道路は渋滞してるのね。で、ご注文は何にしましょうか？」

「コーヒー2つ」

「コーヒー2つね。ここで、休んでいったらいいわ」

喫茶店は、意外にも人は少ないが、その誰もが地震の話をしている。立花が話す。

「北千住まで、どうやって帰ったらいいかしら」

「そうだね。まずは、上野駅までなんとかしていこう。常磐線だったら、早くに復旧するかもしれないし、そうしたら、北千住まですぐでしょ。でも、足、大丈夫かな。ちょっと、見せて」

立花は、袴田に、足を差し出した。袴田輝友は、足を手にとって、ストッキングごしに見える立花里緒奈の足首を凝視した。うっすらと赤みをおびて腫れ上がっている。

「少し、腫れているようだね」

「しばらく休んだら、歩けると思うわ」

袴田輝友は、妻の佳穂の足を思い出していた。佳穂の足を舐めるのが好きだった。佳穂と入浴する際、佳穂の顔を見ながら、佳穂の足を舐めた。足の指、一本一本を丁寧に、指と指の間に舌を入れながら、佳穂の足を愛した。そして土踏まずの部分を舐める。そんな思いに耽っていると、佳穂が、今どうしているかが気になってきた。輝友は、まだ、立花里緒奈の足を手にとっている。輝友は、足の裏のツボを、ぐいっと、ひと押しした。

「あっ！ 気持ちいい。もっと、して！」

「これで、終わり。ちょっと、電話かけてくるね。僕の奥さんに」

薄ピンク色の公衆電話がカウンターに置かれてあった。

「いまどき、めずらしいけど、こんなときには役に立つね」

袴田は、中年のウェイトレスに話しかけた。

「最近、使う人いないけど、たぶん、使えると思うわ」

袴田は、妻の会社に電話をした。

「佳穂か？ そっちはどうだ」

「こっちは、事務所の揺れは激しかったわ。今は、だいぶ落ち着いてる。電車が止まっているよだから、今日は、事務所で泊まってく人もいるみたい。私も様子を見て、そうするかもしれない」

「電車が動かないからな。下手に動くとはよくない。今、東京駅近辺にいる。電車が動きそうにないから、とりあえず、上野駅までどうにかして行って柏まで帰るよ。夜には遅くとも、常磐線も動き始めるでしょ」

「そうね。気を付けて」

「公衆電話があったら、また、もう一度、電話いれるよ」

袴田は、電話を切り、立花が待つテーブルへ戻った。

「奥さんと、仲がよさそうね」

「ああ、仲いいよ。彼には電話しなくてもいいの？」

「彼は、システム・エンジニアで出先が多いから、携帯じゃないと通じないの。携帯は通じないでしょ。でも、羨ましいなあ。あ～あ、私の彼も、ちゃんと結婚話を進めてくれないかな？」

「進めてくれないかなってというのは、どういうこと？」

「なんか、はっきりしないんです」

「男はね。臆病なんだよ。見守ったらいい」

「見守ったら、このまま、だらだらといっただけよ」

「だろうね」

袴田は時間が気になっていたの、話を切り上げようとしていた。

「そろそろ、歩けるよね。上野まで行こう」

「足の裏、揉んで！」

「なに？」

里緒奈は、自分の足を、輝友に突き出す。輝友は、少し困った顔をする。

「10回だけだよ。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10。はい終わり」

「こっちも」

里緒奈は、捻った足と別の足を、輝友に突き出す。眉をひそめて、里緒奈を見る。

「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10。はい、終わり。あなた、結構、厚かましいタイプだね」

「いひひ。そうかも。では、行きましょ！」

袴田輝友と立花里緒奈は、山手線に沿って北上し、上野駅を目指して歩き始めた。人の流れは、先程よりも多くなっている。あたりは、もうすでに薄暗い。そろそろと人の群れの中にまぎれて、二人は目的地へ向かった。

細い路地を通り、細い橋を渡り、大通りに出ると、秋葉原のワシントンホテルがあった。念のため空部屋があるかどうか確認しようとしたが、建物前に満室の表示が貼られていた。それでも、一階エレベーター前には、座り込む人達が数名いた。

「やっぱり、どこも空いてないな。歩ける？」

「まだ、大丈夫、駅を確認しましょ。電車が動いているかどうか」

立花をホテル前に待たせて、袴田は、秋葉原駅に確認しにいったが、状況は同じであった。辺りは、陽も落ちて真っ暗になっている。さらに北上を続け、二人とも無口になり、ただただ、歩くばかりであった。立花は、足に豆ができたようで、痛そうにしてびっこを引いて歩く。

「もう限界！」

里緒奈は今までの我慢の糸が切れてしまった。

「もう、ムリ歩けない！」

里緒奈は全身脱力して、路上の真ん中でペタンと座り込んでしまった。道行く人は座り込んでいる里緒奈を振り返り見ていた。この非常時に道路の真ん中に座り込んでも自然な風景に見える。

「わかった、どこかで夕食を食べよう」

幸いなことに、御徒町付近まで来ており、二人は近くの定食屋に入ることにした。定食屋に入り、テーブルにつき脱力して、立花は、意識も朦朧とした感じで、ぼーとして、下を向き黙りこくっている。

「変な男に拉致されて、歩き回され、足首は捻挫して、足の裏は豆だらけ、あ〜」

「あなた、おもしろいね。はじめの印象と、なんか、全然違うね。甘えてんの？」

「違うわよ。本心をいうだけでしょ。あー、イチくん、助けて！」

隣の二人組のおばちゃんに話を聞かれているのが気になる。

「イチくん、というのは彼氏の名前か。残念ながら、彼氏は助けにこない」

「歩けない」

「しばらく、ここにしよう。まあ、どうせ電車も動かないことだし」

肉野菜炒めと、生姜焼き、それと小皿2、3品がきた。立花は、生姜焼きを黙々と食べ始める

。

「で、イチくんとは、いつ結婚するの？」

「まだ」

「まだじゃないでしょ。まだじゃ」

「イチくんは、システムエンジニアなの」

「それは、さっき、聞いた」

「忙しいのよ。私と会う時間もないくらいに。そして、ステップアップを狙って、資格も取得しようと考えているの。でも、なかなか取れないのよ。しかも、長男で福井に実家があって、酒屋を継ぐことも考えているのよ」

「複雑そうだね」

「いろいろ話しているんだけど、仕事も忙しいし、経済面でも不安もあるし、イチくん以前わたしに言ったのよ。自分に自分以外の人生を背負うことができるのか不安だって」

「立花さんのこと、真剣に考えている証拠じゃないの。いい奴だと思うよ」

「だから、イチくんがいいと思う方向でいいと言ったの。どちらでもいいから、早く決めてって言うと、もう、別れたって言うの」

「おいおいおい、穏やかじゃないね。逃避癖がありそうだな」

「袴田さんの結婚の時は、どうだったの？」

うん、そうだね。いろいろあった、と言って袴田が口ごもっていると、隣に座っている二人組の50才過ぎのおばちゃんが、話に割り入ってきた。

「そんなの、やめておきなさい！ へたれ男と、付き合ってもどうしようもない。すぐにやめるべきよ。ねえ、高田さん」

「そうよ。結婚という時に、覚悟を決められないような男はどうしようもないわ。そう、思うでしょ。お兄さん」

「まあ、結婚は覚悟と導きだけだね。私は、彼女の彼氏をあまり知らないし、へたれかどうかなんか、知らないのよ、何とも言えません」

「そう？ 歯切れわるわね。男は潔さなの。気持ちよさなの。うちの旦那もへたれだけど、潔いわよ。負けは負けって認めるわ。潔さよね。八田さんもうなづいてる」

「私の場合は、結婚を決めてから2年間待ってもらいましたよ。社内試験があって、それをとってから結婚しようということにして」

「あら、潔いじゃない。高田さん。ねえ」

「でもね。もうひとつ試験受けるから、もう1年待ってくれっていったら、びんたされました」

「あら、潔くないわね。八田さん。ねえ」

「だからね。男はどこまでいっても満足できないんですよ」

「そういうものなの？ でも、方向性は決めるべきでしょ」

「決断するのも、当人にとっては難しいことだと思うよ」

「いつの間にか、イチくんの味方になってる」

「味方とかじゃないよ」

「それじゃあ、お二人さん、私達は、これで失礼します。すいませんね。じゃまして」隣の二人組のおばちゃんは店を出て行った。二人はその二人に一礼した。

「突然、現れたね」

「でも、話は参考になったわ。男は潔さよ。彼を諦めようかしら。もう、本当に嫌になってきた」

「その豆腐を食べたら、出ようか」

「そうしましょう」

そのまま、上野方面へ歩いていくと、道路の十字路の角に電話ボックスが数台あった。多くの人が並んでいる。袴田と立花もその列に加わった。

「休むと余計に歩きたくなくなる。脚が棒のようだ。そうだな。電車も動いてなさそうだし、このまま、歩いて帰ろう。というわけにはいかないから、上野近辺の自転車屋で自転車を買って、それで立花さんの家まで行くことにしようか」

「自転車？ 北千住まで？ 相当あるわよ。普段でも乗ったことない」

「それ以外、方法はないでしょ。じゃあ、歩く？」

「もう、歩けない。十分。もう、十分。上野駅で待つてようと思ったの」

「たぶん、この調子じゃ。だめだ。まだ、復旧の目処が立たない。駅の構内放送、聞こえたでしょ。電話し終わったら、自転車を買う。上野駅まで一緒に歩いて、立花さんは上野駅でしばらく休憩。僕は自転車を買に行き。いい？」

「わかった」

20分ほど並んで、公衆電話の順番が回ってきた。袴田佳穂は、会社の事務所に泊まると言っている。輝友は、自分はまだ、上野近辺にいて、これから自転車を買って柏まで帰ると連絡した。どこか泊まっていけばいいと佳穂は言うが、ホテルもどこも満室。歩いて来る途中にあったレンタカーもすべて貸出中。残るは自転車しかないと伝えた。輝友は、佳穂と一緒にいたいと心の中で思った。電話先の佳穂は妙に落ち着いていて、こちらを心配している。

「なんか、佳穂、愛している・・・」

「えっ？ どうしたの？ こんな時に」

「いや、こんなときだから」

「輝友、弱ってんじゃない？ 大丈夫？」

「もう、歩きたくない。いや、大丈夫だ。自転車で帰る。心配ない。それじゃ」

袴田輝友は疲労で、思考回路までもおかしくなり始めている。脚の付け根や、ももの筋肉、心

くらはぎ、そして、足の裏、すべてに痛みを感じていた。革靴はきつい。

立花里緒奈が、公衆電話ボックスから出てくるのを待ち、上野駅まで歩き、それから予定通り、立花を駅に残し、袴田は自転車を買いに出た。上野駅周辺は、人でごった返している。地べたに座り込み、ただただ、待つだけの人。疲労困憊でこめかみを親指と中指で押して、考え込むようにしている人。電車の復旧の見込みはないのだから、今夜は一晩、飲みに行こうと言ってる連中もいる。精神衛生上も健康上も待つよりよいだろう。途中、店先にあったテレビで報じていたニュースでは、宮城県牡鹿半島の東南東沖130kmの海底を震源としてマグネチュード8.8（後日、マグネチュード9.0と修正）の地震が発生し、東日本沿岸部全域に渡って津波が襲来したことを伝えていた。壊滅した町は複数、被害は甚大であり、死傷者数は今の段階から相当数にのぼっていた。余震も続いている。16年前の阪神淡路大震災を思い出していた。朝起きると、テレビで伝える死傷者数は百名ほどであったが、時間の経過と共に瞬く間に増加の一途をたどっていった。底知れぬ恐ろしさを感じている。千葉のコンビニートも炎上している。ぶるぶると、武者震いというか、恐怖というか、この非常時の空気を肌で感じて、落ち着いていられないような気持ちになる。首都東京の鉄道は完全に麻痺状態になり、大勢の帰宅困難者が駅構内に滞留し、大混雑となっている。袴田輝友は、自分自身もこの群れの中のひとりだと思った。

人々は休む場所や食事をする場所を探している。浮ついた街の中を掻き分けて行くと、幸運にも近くに自転車屋があった。そこで街乗り用の荷台がある小型の折りたたみ自転車を購入した。これなら、途中で電車が動き出しても、たたんで電車に載せることができる。他の客も同じようなことを考え、袴田と同じデザインの自転車を購入しようとしている。その次の客も同じだ。

袴田は、すばやく自転車に乗り、立花が待つ上野駅へと向かった。上野駅では、立花は、地べたに座り込んで、靴を脱いで、群がる人々の中、一定の空間を占拠していた。

「お待ちせ！ 後ろに乗って！ これで北千住へGOだ」

立花は、急にきゃぴきゃぴとはしゃぎ出し、後ろの荷台に乗った。

「なんだか、楽しい！ 私、重いけど大丈夫？ いひひ！」

「ああ、大丈夫。じゃあ、出発！」

二人は、高速道路下の幹線道路の歩道を走っていたが、あまりに人が多く、進むに進めない状態であったので、歩道からはずれ車道を走ることにした。

「すごい人の流れだ。みんなと同じようにやっていると、同じふうにはかなんない」

袴田は自分の名案に酔いしれていたが、慣れない二人乗りのせいか、ぐらつき、車道のほうへバランスを崩し、走行している自動車と接触しそうになった。

「ばかやろう。気を付けろ！」

運転者は、窓から首を出して、二人を怒鳴りつけた。

「お前こそ、気をつけろ！」

袴田は、負けじと叫び、運転手は袴田を一瞥して、先へ行ってしまった。

「驚いたな。あの車」

「ちゃんと、バランスとって走ってよ」

輝友は、里緒奈を自転車の後ろに乗せて走っている。あったかい気持ちになる。多少、息がき

れて、脚も張っているが、この長い髪の穏やかなふっくらした顔の女性の、穏やかでない心の内を垣間見たことにより、少し近づけたような気がしていた。それを考えると疲労も溶けていくように感じられる。

国道4号線に入り、どんどんと道を進んでいく。歩道の人々の数もいっこうに減らない。国道4号線は、途中、渋滞で自動車が進めない区間もあれば、途端に速いスピードで走っている区間もある。足音ばかりが耳につく。足早の黒い群れは、何かおかしい高揚感に染まっているように感じられた。自転車を漕ぐ。漕ぐ。漕ぐ。

「ちょっと、気を付けてよ！」

里緒奈が、悲鳴を上げて、輝友に後ろから抱きつく。肉の密着する感触が、さらに輝友を安心させる。さらに長い髪が乱れて女の臭いは拡散される。またも、自転車のバランスを崩した。

「わるい。わるい。気を付けるよ」

袴田輝友の呼吸も荒くなってきていたが、麻痺する体の疲労を無視して、そのまま北千住方面へ進んだ。

北千住駅に着くが、大混雑ぶりは上野駅と同様であった。JRの再開を待つ群がりや、バス停に並ぶ長蛇の列で、周辺は騒然としている。まさに都市の脆弱性が露呈されている。交通が機能しなくなればこのとおりだ。麻痺した都市はいつまでたっても回復しない。人々はなすすべもなく立ち尽くす。普段の日常が何とも危ういものの上に立脚していることか思い知らされる。完璧ぶって永遠に日常が続くかのように思い込んでいるが、そのシステムは危うい。堅牢で盤石なものを作り上げた自負してならない人間への痛烈なる目覚めの一発のように思えた。そのシステムが壊れるとき、人は人に帰る。

「ここも同じか」

しかし、人間はしぶとい。

「一旦、私の家に連れて行って、駅から近いの」

袴田は、地下通路を通り、駅の反対側へ出た。地下通路は電車の再開を待つ人で横溢している。駅の反対側の街の飲食店等は、すでに閉められている。通りの明かりも暗い。その中を少し走ったところに、立花のマンションがあった。5階建てのマンションである。

「じゃあ、僕はここで」

ようやく仕事を果たせた。豊洲と東京駅の間で捻挫した立花を拾い、一緒に歩き、騒然とした東京駅を抜け、山手線沿いにくたくたになりようやく上野駅にたどり着き、自転車を買い、けっこう重い立花を後ろに乗せ、北千住の立花の自宅に届け上げたのである。感無量である。

「中へ入って、疲れたでしょ。少し休んでいって。それに、しかも捻挫して歩けなくなった私を、ここまで送ってきてくれた恩人を、無碍に返せないわ」

「ああ、ありがとう。そうしたら、甘えさせてもらうよ」

「そうして」

玄関キーを開け、自動ドアが開き、エレベーターに乗り3階に着いた。自転車も一緒に持ち込む。左に少し行ったところに立花の部屋に着き、ドアを開けた。自転車は部屋の前に置き、中へ入った。家の中の湿気の臭いが鼻につく。

袴田は、立花に一杯の冷えた氷水を渡され、ごくっ喉で飲み干した。

「顔と手だけ洗わせて」

「洗面所は、その扉を入ったところ」

石鹸をつけて顔をぶるぶると荒々しく洗う。あごひげが伸びている。じょりじょりする。顔をタオルで拭き、手を洗い、うがいをする。そして、洗面所を出てソファに座った。

「一瞬だけ、休ませてもらっていい？」

「いいわよ。私は、キッチンで着替えるから覗かないでよ」

「ああ」

袴田輝友は、またたくまに、意識はなくなった。ふと気づくと、家用のラフなウェアに着替えた立花里緒奈が、目の前でテレビを見ている。なにか、ほっとできる人だ。

「ああ、寝てた」

「起きた？ 30分くらい寝ていたわね」

「すっきりした」

袴田は、伸びをした。

「なにか飲み物もらえないかな？」

「ちょっと待っててね」

冷蔵庫からオレンジジュースを持ってくる。袴田はごくりと飲む。

「彼と連絡とったの？」

「まだ、連絡とれない」

袴田は、立花の部屋の中を見渡していた。

「そっか。彼は立花さんのことを心配しているよ。自転車に乗っているときに考えたんだけど、彼は、まだ、自分に自信が持ててないんだと思う。自分が理想とする人間像に、まだまだ足りてないんだとっていて、その自信のない姿を立花さんに見せたくないのだと思う。だから、立花さんがプレッシャーをかけると、別れたいって言うんだ」

「・・・」

「こんなことを聞いたことがある。成功する男は、自分を一番、必要としてくれる人を大事にするって。つまり、自分の価値を一番認めてくれる人を最も大切にする」

「私はイチくんを必要としていて、価値もわかっている」

「男は、まだまだだと思っている。できる奴ほど、そう思っていると思う。彼は、結果として現状維持を続けている。彼は、何が大事かわからなくなっているんだと思う」

「うん」

「今、別れたら、彼は、とても辛くなると思う」

「そう」

「ありがとう！ 寝て気分がよくなった。これで、帰るよ。電車動くでしょう。今日中には」

「わかった。本当にありがとう。連絡先教えて。お礼をしたいし」

「お礼とか、そんなものはいらぬけど、一応、これ名刺。渡しておきます。あと、ひとつお願い！ ハグしよう！」

「いいわよ」

輝友は、里緒奈とハグをして、安心感を感じた。

「今日は、大変な一日だったね。それでは、これで帰る。ではね」

「ありがとう！」

袴田輝友は、家の扉を開けて、そのまま、自転車をひきずり、マンションを出た。そして、もと来た道をたどり、北千住駅へ戻った。あいも変わらない混雑状況であった。電車も動いていない。バスもほとんど動いていない。無数の人々は不安と疲労と高揚感のないまぜの表情で立ち尽くしている。外は思いの外、寒い。小腹がすいたので、ラーメン屋に入って、寒さを凌ぎ、空腹を満たそうと考えた。

ラーメンを食べ終り、体も少し温まったところで店を出ると、目の前に、公衆電話があった。人は並んでいない。時間も遅いが、佳穂に電話すれば、出てきてくれるだろうか？ 不安に思いながらも電話をかけてみる。

「佳穂？ まだ、寝てなかったのか？」

「まだ、仕事しているの」

「あれ、まだ、そんな時間だったかな？」

「いつもだと、22時くらいなら仕事をしている人もいるわよ。今は、地震の報道番組見ながらしてるわ。大変でしょ。今、どこにいるの？」

「北千住なう」

「私も、明日、柏へ帰るわ。あなたの顔を見たくなった」

「そうか。よかった。実は、僕もそれを言おうと思っていた。こっちに帰ってきてくれ。今になって思うんだけど、別居したのは間違っていた。もう一度、一緒に住もう」

「ううん。それは、あとでゆっくり話しましょ。でも、地震が起こって、あなたのことが頭に浮かんでしょうがないの」

「なら、明日、柏で、じゃあ」

共働きに疲れ果てていた。平日は仕事のみ。帰宅時刻は0時近く。土日は掃除や買出しで終わる。自分が苦しいのを相手のせいにしてしまう。家の中は常にストレスのはけ口の場所。家事は押し付け合い。お互いに安らぐ場ではなくなっていた。会話と言えは暴言や罵り合いだけ。通勤時間は1時間半ほど。関係がおかしくなったのはお互いが多忙を極めてからだ。共に生活する意味もない。もう、どこへも行けない。

通勤時間を短くしたいと言って、佳穂が出て行き別居した。そして半年ほど経ち、今に至っている。その間、輝友、佳穂は考える時間ができた。二人とも苛立ちとは無縁な時間を過ごす。二人は、異なる場所でそれぞれに思い巡らせていた。以前の二人は仲が良かった。家の内装も二人で考えて、壁紙を貼り、インテリアも工夫した。平日でも夫婦仲間と一緒に食事をするこももあった。アウトドアが共通の趣味で週末はよく山登りにいった。輝友は、このままではいけないと、今、直感する。なにかを変えないといけない。

電車は、動かない。袴田輝友は風よけの場所を探していた。22時を過ぎても、煌々と明かりが

付いているのは、銀行のATMコーナーであった。その一角を袴田は陣取って、座ることにした。大勢の人が詰めている。確かに、外にいるより、寒さは凌げる。疲れきった脚を脱力できるので、それだけで心地よかった。立ちっぱなしであれば、脚が棒のようになる。耐えられる寒さのぎりぎりのラインであった。体中の熱が、かろうじて寒さを押し返している。その熱は、心の中に再び灯ったものによるもののように思える。周囲の多くの者は携帯をいじっている。時間が過ぎゆくのを待つだけであった。

座ってから30分以上過ぎた頃、蛍の光の音楽が流れる。

「ATMをご利用いただきまして、ありがとうございます。こちらのATMは23時をもちまして終了いたします。扉が締まりますので、お気を付けてお帰りください」

アナウンスがATMの終了を告げる。

「くそっ！ ずっといられると思ったのに」

袴田輝友は、棒のような足に力をいれて立ち上がった。ATMコーナーを出た。

「さてと、どこに行けばいい？ とりあえず、駅に向かおう。外は寒いな」

JRの運行状況は変わっていない。地下鉄改札口へ向かうと、千代田線は北千住と代々木上原の折り返し運転となり動いていることがわかった。しかし、23区から出ることはできない。袴田は、自転車を折りたたみ、地下道へ行って、待つことにした。フリーペーパーを取り、尻の下に敷いて、地下道の床に座った。疲労感から誰彼に当たりたい衝動に駆られてきた。冷える夜の地下道でどうして俺は横になっているんだ？ 嘆いても何も変わらない。とにかく、じっとしているしかなかった。寒いし、疲労感がどうしようもなかった。

ふと、明日のことを考えていた。

明日からの仕事はどうすればよいのだろうか。明日は少なくとも仕事はできないであろう。ビルオーナーの担当の頭の傷は大丈夫であろうか。明日、携帯が復旧したら連絡をとってみよう。血まみれになった契約書は、また後で作ればいい。

佳穂は、明日、柏へ「帰る」と言っていた。輝友は、以前の二人の間にあった一糸乱れぬ一体感のようなものを思い出していた。佳穂の心が手にとってわかるくらいの距離にいた頃のことだ。輝友は、佳穂の足の先の先まで愛していた。

0時を過ぎると、どこからか声が聞こえてきた。

「避難所が開設されました。場所は、千住桜小学校の体育館です。誘導しますので、慌てず、ご希望の方は、こちらに来てください」

袴田は立つ元気もなかった。もう、電車は復旧しないってことか。呆然と地下道の天井を仰いでいた。疲れた。これから、柏まで帰れるわけないだろう。悪態をついて、ぼそっと独り言をいった。どうするか。避難所は、どうせ体育館だ。心の中でつぶやいていた。そうだ。立花里緒奈に、緊急事態だということで、頼み込んで泊めてもらおう。もう、それしか方法がない。腰や背中や脚が、ばらばらになりそうな痛みを感じながら、自転車で、さきほど行った道を通って、立花里緒奈の家へ向かった。

マンション前に着き、部屋番号を入力し呼び出しボタンを押した。

「立花さん、夜遅くごめん。電車も今日中には、動かないようだし、もう、これから自転車で柏

まで帰る体力もない。わるいけど、泊めてほしい」

情けなくなるが、力を振り絞って話した。

「誰だお前」

男の声が聞こえた。

「立花さんの家ではないですか」

「そうけど・・・」

里緒奈、知っているか？ この人？ という声が小さく聞こえた。

「今、行くから、ちょっと、待ってて」

しばらくすると、男と、立花里緒奈が降りてきた。

一瞬、言葉を失っていたが、気まずいと思い、袴田は声を発した。

「袴田です。立花さんの彼氏？」

「そうけど、話がおかしいだろ。女の家に来て泊めてくれってのは」

「ですね。お邪魔しました。帰ります」

「ちょっと、待てよ。どういうことなんだよ」

里緒奈が、男に、袴田は恩人だということを説明した。里緒奈はどうも話をしていないようであった。簡潔な説明により男は状況を理解する。

「泊まる場所がないのであれば、泊まれよ」

男は話した。男は、長身の痩身で、先程の攻撃的な姿勢も和らぎ、顔の表情もゆるめて友好的になった。

「ありがとう。でも、やっぱり帰る。家に帰らないといけない気がしてきた」

「いや、でも、ひどく疲れているだろ」

男は引き止める。

袴田は男の肩を叩いた。疲労のせい、脈絡なく少し感情的ないいかたをしていた。

「本当にありがとう。僕には奥さんが待っているんだ。ああ。そういえば、君は、イチくんと言ったね。ひとつだけ言いたい。自分を必要としてくれている女性がいることがどれだけ尊いことか、知ったほうがいい。手放したら、もうそれきりだ」

少しの沈黙がその場を支配した。立花里緒奈が沈黙を破る。

「袴田さん、もう、いいの。袴田さんが帰ったあと、イチくんから連絡があって、家に来てくれたの。そして・・・」

「そして、なんだ」

「プロポーズしてくれたの」

「そうか。そうだったのか。それはよかった」

袴田輝友は、笑みを浮かべた。そして自転車に乗り、見送る二人を背に、よたよたとペダルを漕いで行った。袴田は、彼らが出した将来設計を訊き出したい衝動に駆られていたが、それはすでに、余計な詮索というものであろう。彼らはしっかりやっていく。こんな事態にならなければ、見ることのできない、またすれ違うこともない立花里緒奈という人の幸せな人生の断片を見た。そして、自分のことを考えてみた。真っ暗な道の中、体は疲労で無感覚になりながら、風をき

って走っていた。佳穂は、明日、うちに戻る。そこでゆっくり話そう。早く家に戻って、心の芯が温かくなる存在の帰りを待っていたい気持ちでいっぱいであった。国道6号に入り、20km以上ある道のりをひたすらペダルを踏み続けた。家に着き、シャワーを浴び、倒れるようにして、ベッドに体を沈めた。どれくらい眠ったのであろう。非常に長い時間、深いまどろみにいたような気がした。目を開けると、隣に佳穂がいた。

了

帰宅困難者

<http://p.booklog.jp/book/50619>

著者：池田真哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ikeshin55/profile>

池田真哉の本

「空の記憶」

<http://www.boon-gate.com/books/index/13990>

「猫山のトマソン」

<http://p.booklog.jp/book/40688>

「虹色タイム」

<http://p.booklog.jp/book/48152>

「見えない敵」

<http://p.booklog.jp/book/50070>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/50619>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/50619>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.